

作成（2025 年度）

簡易版 TP（ティーチング・ポートフォリオ）

氏名	中村 元直
所属機関名	生命科学部 生物科学科
職位	教授
在籍年	4 年（+理学部 8 年）

教育の責任

【科目名および科目番号】動物生理学（F20820）

【開講年度】2023-2025 春 【学年】生命科学部生物科学科 2 年 【種別】必修

【科目名および科目番号】細胞情報制御学（F20940）

【開講年度】2024-2025 春 【学年】生命科学部生物科学科 3 年 【種別】必修/選択

【科目名および科目番号】ヒト疾患学（F20970）

【開講年度】2024-2025 秋 【学年】生命科学部生物科学科 3 年 【種別】必修/選択

【科目名および科目番号】臨床栄養学（F14240）

【開講年度】2016-2025 秋 【学年】理学部臨床生命科学科 3 年 【種別】必修

【科目名および科目番号】バイオサイエンス実験（F21000）

【開講年度】2023-2025 秋 【学年】生命科学部生物科学科 2 年 【種別】必修

●生命科学部生物科学科に属し、教授として学部 2 年生には生命科学の基礎となる「動物生理学」、学部 3 年生には専門性の高い「細胞情報制御学」と「ヒト疾患学」を担当している。加えて理学部臨床生命科学科 3 年生の「臨床栄養学」を担当している。この科目は臨床検査技師国家試験受験資格を得るための必修科目の 1 つで、重要科目と位置付けられる。また、ゼミ生の卒業研究、大学院生の修士論文研究の支援を行っている。

教育の理念

●生命科学は好奇心を根底とする学問である。自身の経験を踏まえてこの学問の面白さを伝えることで、学生には率先して新しい知識を身につけ、未開の領域に積極的に踏み込む気持ちを持って欲しい。講義はただの単位取得の目的でなく、社会や医療、食料問題を解決するため科学的思考力を養うことを目的として欲しい。

教育の方法・方針

●生命科学の原理や摂理を理解し、これらを発見、証明するための科学的手法（基礎実験）を身につけることが必要である。そこで 2 つの方針とそれぞれに対応した方法について述べる。

方針 1：人体の生理的な変化や疾患時の異常を様々な生命科学の側面から理解できる能力を養う。

方法 1：講義で使用するスライドはすべて事前に mylog にアップし、重要ポイントとなる部分は授業開始時にプリントを追加配布して注目を促す。学生の求めに応じて補習や質問受付などを用意する。

方法 2：授業の理解度を把握するために「振り返り学習」という名目の小テストを行い、答え合わせや解説を行うことで理解度を深めている。解説の補足は個別対応でも受け付ける。

方針 2：「バイオサイエンス実験」を活用し、2 年生次から実験器具の取り扱いや原理、注意事項などを教え、事故や怪我から身を守り、確度の高い実験ができる手法を身につける。測定原理を理解し、様々な反応操作から化学的思考を養い、得た結果に対してはその解釈法を学び、考察力を高める。

方法 1：目的のためにはどの器具が必要で、どの機器で計測するのか。説明し、理解させた上で測定結果の解釈や考察をレポートにまとめさせる。

方法 2：測定結果（数値）にはバラツキが生じ、そして統計学的手法で精度を考察することを学ぶ。

方法 3：グループ実習で課題を協力して解決させ、ポイントを省察させ、レポート作成を支援する。

教育の成果

●講義は取って出欠を取らないが 8 割以上の出席率で、成績が「C」以上の割合は 9 割を超える。授業アンケートでは 8 割以上から良好な評価を得ており、責任科目の到達目標は概ね到達できていると思う。大学院進学者も多く、過去 10 年間の卒業/在籍者数は 34 名になる。指導した大学院生は全員、1 年生から毎年秋に開催される日本生化学会大会で発表してきた実績がある。

今後の目標

●生命科学の理解度を自己評価できるツール（主に小テストやレポート）を増やす。理解度を知る上で講義中の学生との対話も重視する。生命科学の理解から医療や健康、さらには高齢化社会に潜む多くの問題を解決するのに必要な知識を学生が習得し活用できる素養が身につくよう、教育者として努力する。

根拠資料

●配布パワーポイント資料●振り返り学習問題●学習補助資料(小テスト)●レポート課題●期末試験問題
●2025 年度春学期授業アンケート